
夢

覺清 宥擲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢

【Nコード】

N8999Y

【作者名】

覺清 宥擲

【あらすじ】

ある日、主人公は幼くして両親を失う。その後、犯人を探す物語。

始まり

私はお父さんとお母さんの部屋から聞こえる音で目を覚ました。

その音は何かを下ろす音とその度に聞こえる生々しい音と誰かの息切れ。

私は音を立てないように動いて、扉の隙間から部屋を見たが、誰かが立っていた以外分からなかった。すると、その誰かは扉の隙間から見ていた私の存在に気付いた。しかし、その人は私を襲わず窓から去っていった。私はその頃、幼く何が起きたのか分からなかった。私はそのまま部屋に入っていた。

「お母さん…お父さん…起きて」

と二人を起こそうとした。しかし、返答は無かった。既に二人は死んでいたが私には理解出来ず、何度も叫んだ、又泣き叫んだ。その声で目が覚めた近隣の人たちは何かしらの異変に気付き、警察と救急車を呼んでくれた。しかし、警察や救急車が来る前に私は、疲れの余り、気を失った。

前兆

ジリリリリリリリリリリリリリリリリガシャ。

ふあゝあと大きな欠伸をして起きた。しかし嫌な夢だったと思いつつも下に降りていった。

彼女の名は、西陽葉瑠。この西陽家に暮らす明るく活発な子であったが、今悩んでいるのは最近、あの嫌な夢をよく見るようになったこと。しかし、彼女は無関心だった。

下に降りると母親の西陽那弥が朝食を作り、食べていた。

「おはよう。」

「おはよう。」

と挨拶したが、やはり父親は居なかった。

父親の西陽啓は普段から仕事の関係で家に居ることはなく、外泊していた。彼の職業は大学の教授で、本人曰くいろいろと研究しているとのことだが、自分は浮気していると思っているのに対し、母親は父親を信頼して野放しにしている。

私は早く食べて、着替え学校に行った。

学校に着き、教室に行くと、友達の碧ちゃんこと齋日碧がいた。

彼女は幼稚園の頃からの親友だ。彼女の目立つ特徴は背の小ささぐらいだが、彼女はその事をコンプレックスに感じている。

「おはよう。」

「おはよう。」

と挨拶した。そしてその後SHRが始まるまで喋った。SHRが終わり、その後平凡に学校を過ごして碧ちゃんと帰った。そこで碧ちゃんに夢のことについて話した。

「嫌な夢を見るの」

「どんな夢？」

「ええと、目の前で何者かが、人を撲殺する夢」
「ほお。」

と言った時、彼女は驚いていた。

「でね、私に気づくと窓から去って行くの」と言った途端、彼女は何かを思い出したような素振りを見せたが、何も言わず、その後別れた。

私は、碧ちゃんの素振りが気になって仕方がなかった。何だろうと思いつつ家に帰った。私は母親が帰ったら聞いてみようと思った。

謎

毎日の夕食は自分が作らないといけないから、母親の帰りを待ちながら作っていたが、碧ちゃんの素振りのことで一杯だった。作り終えた頃、

「ただいま。はぁ、もう嫌になっちゃう。」

と言いながら、母親が帰ってきた。

思い切って、自分の過去について聞いてみた。

過去についての質問は私は幼き時、何故此処にいるのかなどについて考えていたが、親はこの人たちということ以外はいつでも良いやと思い始めてから考えなくなった。

又自分にとってどうでも良いことは、ほっとくようになり、自分の幼いとき以前（0～3歳ぐらい）の記憶を覚えていないことをどうでも良いと考え、ほっていた。しかし、この覚えていないことを重要だと考え、出たことだ。

「0～3歳頃の私について教えて。」

すると、母親は

「どうしたの急に。」

「最近、なんか0～3歳頃の自分について知りたくて。」

「ふーん。葉瑠、もしかして記憶が戻ってきた？」

「えっ、記憶が戻ってきたってどういうこと？」

「いや、いいのよ。何でもないわ。」

「何でもなくない。どういうことか説明して。」

と言った途端、母親は逃げるように自分の部屋に入ってしまった。

私は0～3歳頃に何かあったと確信したが、その何かは、まだ分からない。

が、とりあえず母親に夕食はどうするかと聞いたら、後で食べるから先に食べていてと言った。私は食べながら、考えていた。

今日の、母親の言ったことから、多分0～3歳頃の記憶は何かあっ

て、忘れてしまった。しかも、逃げるように部屋に入っていた様子から、相当言いたくないことかもしれない。そして碧ちゃんのあの様子から夢は現実で起きた事件に似ている、若しくは本当にあったのかもしれないからあんな素振りをしたのかといろいろと考えているうちに食べ終えていた。

私は風呂に入っても、ベットに入っても頭はそのことで一杯だった。下では母親が食器を片付けている音がするが、今日は、聞くのは止めようと決め、考えるのを止め、寝た。

衝撃

ジリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリガシャ。

今日はいつになく眠かった。昨日は考えるのを止め寝ようとしたが、頭が冴えて、寝るのに時間がかかったためだ。

何時もの通りに下に下りると、珍しく父親の姿があった。不思議に思いつつも、

「おはよう。」

「おはよう。」

「おはよう。」

と挨拶をした。

久しぶりに見た父親に違和感を覚えた。

椅子に座ると母親は

「学校から帰ってきたら、話すことがある。」
と言った。

私は話される内容が気になったが、取り敢えず、食べた後支度し学校に行った。教室には碧ちゃんがいた。碧ちゃんは私を見ると近づいて来て、言いづらそうに俯いていたが、彼女は、私をもう一度見て、話し始めた。

「あのね、驚かないでね。」

「何が？」

「昨日葉瑠ちゃんが話した夢のことについてだけど…」

「うん。」

「実言うと、夢のことが気になり、昨日家に帰った後似た事件あったかどうか調べたのよ。そうしたら、その夢に似た事件があったの。」

「えっ？」

「その事件はある民家で、両親が無惨に殺され、犯人は窓から逃走したらしく、その両親のたった一人の子供が生き延びたという巷を

長らく騒然とさせた事件なの。」

私は衝撃を隠せなかった。まさか自分の夢がそんな有名な事件に似ているとは、と。

「でね、犯人はまだ捕まってないの。」

更なる衝撃にたじろきかけた。

そして、何とか衝撃から立ち直った私はふと昨日の素振りについて聞いてみた。

「それにしても、昨日の素振りは何だったの？」

「いや、気になったならごめん。家に帰ってやるべきことを思い出ただけだから。」

「ええ。」

「ほんとに、ごめん。」

「昨日気になって眠れなかったんだよ。」

「まじ、ごめん。」

「うん。分かったよ。」

その後、又平凡に学校は終わり、その日は碧ちゃんと一緒に帰らず、急いで家に帰った。

家に帰るとやはりまだ二人は帰っていなかった。夕食を作りながら、帰りを待った。最後の一品を作っている最中、二人が共に帰ってきた。二人は椅子に座った。作り終えた私は料理を並べ、座り、夕食を食べた。

夕食を食べ終えてから、二人はゆっくりと今まで隠してきたことを話し始めた。私には実の母親羽馬那柚井と父親の羽馬那式司がいること、そしてその両親は何者かに殺されたこと、それで親戚の西陽家に引き取られたこと、自分が両親が死んだことのショックによって記憶喪失になったことなどを。

話し終えてから、ふとあることが聞きたくなり、聞いてみた。

「質問していい？」

「何？」

「犯人は殺した後、何処から逃げたの？」

「えっと、確か窓からだったと思う。」

私は自分が事件の唯一の生き残りで、又事件の唯一の目撃者であるのをはっきりと確信した。

私は話してくれたことに感謝して、部屋に入っていた。

しかし、記憶は戻っておらず、自分に腹が立っていた。でも一方で記憶が戻ることで起きるだろう影響に怯えていた。

取り敢えず、今日はいつもとより疲れたので、風呂入った後すぐ寝た。

夢

私は部屋に居た。私は部屋から出ると、近くの一部屋が少し開いていた。その隙間から中を見た。中には立っている人が一人居た。その人は私の存在に気づいたが襲わず、窓に向かった。そして、窓から逃げるとき犯人は左腕に怪我を負っていたのか、左腕を抑え窓から去っていった……

[illegible]

ハ
ア……
ハ
ア……
ハ
ア……
ハ
ア……。

又嫌な夢を見た。しかし、いつもと違った。それは部屋の中に立っている犯人が窓から逃げるとき、左腕を抑えていたことだ。もしかしたら、過去を知ったことで夢が変わったのかと考えたが、取り敢えず止め、下に下りた。

下りるとテーブルの上には私の朝食があった。しかし、いつも居る筈の母親の姿がなかった。私は殺されたのかと考えた。

もう一度テーブルを見ると、紙があつた。紙には

「今日は大事な用事があるので暫く帰りません 母より」と書いてあった。

私は、ほっとして朝食を食べて学校に行った。

教室に入ると、碧ちゃんがおっはよーと言って寄ってきた。私は碧ちゃんに

「ねえ、そういえばあの事件で犯人に繋がる手掛かりが現場に残ってたか調べて欲しいの。」

と言うと碧ちゃんは分かったの一言で受けてくれた。この日は担任の英語教師大呂修治先生に用があつた。

放課後、職員室に行き中に入ると熱気が凄かった。最近様々な部屋のエアコンが故障し、職員室のエアコンも同様に故障したためだ。

大呂修治先生の席は扉近くにありすぐ分かった。大呂先生は暑さのため腕捲りをしていて、左腕を見るとうつすらと傷痕があった。私は犯人は逃げるとき、左腕を抑えていたことを思い出した。

しかし、傷のことについて聞くより、まずは用事を片付けようと考え、先生の側に行った。先生は私に気付くと、椅子を持ってきた。

私が側に来た後、先生は椅子に座るよう指示した。椅子に座ると先生は

「西陽、ここ最近授業中上の空らしいな。いろんな先生が心配していたぞ。何かあったか？」

「いや、無いです。すみません。」

「そうか。取り敢えず授業中は上の空にならないようにな。」

「はい。」

「話はこれで終わり。帰っていいぞ。」

「はい。あの先生。」

私は傷のことについて確認しようと思った。

「何だ？」

「少し聞いていいですか。」

「構わん。言ってくれ。」

「その傷はいつついたものですか？」

「この左腕のか？ええと、うーんとな……すまん忘れたわ。」

「そうですか。ありがとうございます。」

職員室から出るとき不意に呼び止められた。

「西陽。何か力になれるなら言ってくれ。」

「はい。」

私は職員室を後にした。

一人帰りながら、考えていた。先生に質問したはいいが、犯人は傷を負っていたのか、負っていたとして犯人は先生なのかと。考えて

いるうちに家に着いた。

帰った後、いつも通り夕食を作っていた。一人のせいか気配を感じた。作り終え、食べた後、風呂に入り、今度はどんな夢になるか考え、寝た。

胎動

今度は私は扉の前に居た。扉は又少し開いていた。やはり、中には犯人が居た。私は部屋の中に入った。

犯人の特徴がよく見れた。犯人は160〜170位で痩せ型、左腕には、筋状の傷が見えた。犯人は私に気づいた。普通なら襲わず逃げるのだが、予想外なことに手に持っていたバットのようなものを振りかざしたのだ。そしてそのまま降り下ろされ…………

ジリリリリリリリリリリ……………

ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…

何故なんだ。今までは扉を開けることは無理だったのに、開けられて、しかも開けたら開けたで、犯人の取る行動が変わった。

私は夢と事件があるのかと疑い、困惑した。困惑しながら、下に下りた。

下りると、何か違和感を覚えた。何かが違う、何だと考えた。よく見たらテーブルの上に朝食があり、しかも、家具が微妙に動かされていた。

私は取り敢えず窓のある部屋全と玄関を見た。しかし、異変はなかった。そして、親も帰っていないかった。テーブルの上を隈無く見たが何もなかった。私の混乱している頭に追い打ちがかかった。

私はテーブルの朝食を殆ど食べる気が起きず、ちよっただけ食べて後は捨て、洗った。着替えて学校に行った。

学校に着き、教室に入ると、碧ちゃんがやってきて、昨日葉瑠が依頼したことについて話した。

「えっと、現場には凶器のバットと脱出に使用したロープが有ったんだけど、何れからも犯人に繋がるものが出なかったらしい。」

私は、碧ちゃんにありがとうと言うと、碧ちゃんは全校集会があることを伝えた。

S H R 終わった後、体育館に整列して行った。

体育館に着くと、校長先生の話があった。どうやら、臨時で先生の代わりが来たから、紹介するとの事。

校長先生の話が終わった後ステージに二人の先生が上がった。

まずは、顔が何か浮世絵の人物のような感じの先生が挨拶した。彼の名は溝野千崎^{つのちのき}で、猫背でどこか怪しげな人だった。

次に筋肉隆々のお爺ちゃんのような人が挨拶した。彼の名は瓶太^{かめだく}空丹森^{にもり}で、髪は殆ど無い。いかにも熱血系のような人だった。全校集会終わり、教室に帰って、平凡に学校を過ごしたが大体上の空だった。又碧ちゃんとは帰らず、そのまま痛む頭で家に向かった。

家に着くと、家を大きく感じた。最近疲れていると自分を納得させ、家に入った。

私はあまりの光景に倒れそうになった。家の壁が真っ赤になっていた。家具も一部倒されていた。私は頭が痛むのを堪え、警察に連絡を入れ、じっと待っていた。

暫くして、警察が来て家に入って調べ始めた。調査開始からすぐ赤い壁はペンキで塗られたものと分かり、その後調べても他は何も分からなく、警察は何かあったら連絡してくださいと言って去っていった。私の頭はパンク寸前だった。私は菓子を少し食べ、風呂に入りそのまま寝ようとしたが、家に誰かが又侵入するかもと考えてしまい、怯えて寝れずそのまま夜は明けていった。

胎動（後書き）

小説情報を色々といじくり回してすみません。私はこれからさらに忙しくなるので更新は前より遅くなります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8999y/>

夢

2011年12月2日14時49分発行